

# だるま窯

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



昭和58年10月を最後に操業を終えた伏見のだるま窯（だるま窯の焼成風景は浅田晶久氏より提供）

だるま窯は、16世紀に始められたとされる<sup>いぶ</sup>燻し瓦を焼く平窯で、両側に焚口と燃烧室があり、中央に瓦を焼く焼成室があります。その形が<sup>だるま</sup>達磨さんが座っているよう

に見えることから「だるま窯」と呼ばれたそうです。

江戸時代以降、盛んに築かれただるま窯は、昭和30年代まで各地で日常的な風景としてありました。

昭和40年代になると燃料となる松材や松葉の確保が困難となり、大量生産による瓦工場とのコスト差や煙による公害問題などが生じたために、ほとんどのだるま窯が全国から姿を消していきました。

京都では伏見の浅田製瓦工場のだるま窯が最後まで残った窯だそうです。創業は明治時代末年で、昭和58年10月まで操業されていましたが、現在はガス窯が使われています。一つのだるま窯で1年間に20回瓦を焼き、10年ごとに窯を造り替えていたそうです。瓦は一枚一枚手作りで、それは今も続けられています。

だるま窯が姿を消していく中で、愛媛県菊間町、群馬県藤岡市、福井県小浜市では今もだるま窯で瓦



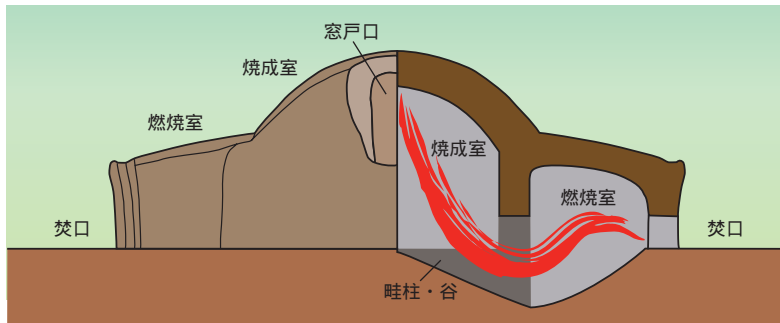
窓戸口の穴から吹き上げる炎は1mにも達する



焼成を終え窯を開けて水を投入



葛野大路三条のだるま窯



だるま窯の構造



出土したトチン

が焼かれており、愛知県、三重県、奈良県、兵庫県では産業遺構として窯が保存されています。また、滋賀県近江八幡の瓦ミュージアムや大阪府の吹田市立博物館などには、だるま窯を復元・展示しており、今も見ることができます。

1958年、伏見区深草瓦町で名神高速道路工事にともなう発掘調査



つづみ型トチンと木型



トチンの使い方

の際に江戸時代末期のだるま窯が発見されています。

2000年に行なった京都国立博物館内の調査では、明治時代のだるま窯を発見しています。窯の上部は破壊されていて基底部分のみが残存していたのですが、調査後、土嚢などで保護をして埋め戻し、今も地中に保存してあります。

2002年から2003年にかけての葛野大路拡幅工事にともなう発掘調査では、右京区山ノ内付近の数箇所の調査区で、瓦質のつづみ型トチンなど、瓦を焼くときに使う窯道具が出土しました。その後、三条通の北側で、だるま窯が見つかりました。調査の最終段階で、調査区の拡張を行なった際に、窯壁と燃烧室の一部を確認しました。窯壁と畦柱は瓦を積んで構築され、床面にも瓦が用いられていました。窯の大半は、おそらく隣家の敷地へと続いていると思われます。

昨年5月、出土したトチンを持

って浅田製瓦工場を訪ね、お話をうかがいました。そこで見せていただいたトチンは、出土したものと形が同じでした。木型を用いて作るもので、合わせ型の跡が縦の線で残ります。出土したトチンにも同様の痕跡を持つものがあります。

つづみ型トチンは「つつみ」と呼ばれた窯道具で、軒瓦や特殊な形の瓦を焼くときに、瓦が接触しないよう固定して効率よく窯詰めするために使われたそうです。

葛野大路三条のだるま窯は、部分的な調査に留まりましたが、この地で瓦を焼いていたことを明らかにすることができました。この窯がいつのものであるのか、わかりませんでした。近所の人によると「製瓦工場があったが、昭和10年の大洪水で倒壊し、その後は再建されていない」とのことです。このだるま窯がそのときのものかもしれません。

(近藤 章子)